



~ 5
6634



Handwritten characters in the top right margin.

Handwritten characters in the middle right margin.

Handwritten characters in the bottom right margin.

Red stamp or mark at the top center of the page.

Main body of handwritten text in a cursive script, spanning across the gutter and down the page.

My Dear Sir,
I have your letter of the 25th
and am glad to hear from you.
I am well and hope these few lines
will find you the same.
I have not time to write you more
at present but will write again
soon. I am, Sir, your
Obedient Servant,
John Bull

尊者水母敬入 六竹の申の宛
牛島 彦彦

その日

わさのそ連のぬわむらひ 波衣のまゝのむら
らぬらふ 佐つて たる人 ぬき長と 是る
昔程 舟の舟士 以圖ふたこ 一書波や 思ひ
中 伝る

親のこころ 一の身 折る ぬきまらぬ
有明の 水小 酒屋 作せ 荷 今

ね 舞の ちま けい かの まぢ だま 杜 回
目 ちの 小 野 小 景 成 芥 平
わ ち の 薬 小 石 産 じ ち ち 少 平 芥 平

秋夜を思ふは母の如く
うらみの花は〜
まゝぬと〜
秋夜師のあつたまを〜
あ〜
田中たつこま〜
空の船〜
か〜
〜
この北の道属の〜
蝶はむ〜
の〜

い〜
ぬ〜
志〜
そ〜
志〜
鳥城の〜
あ〜
秋〜
日本の孝白う坊小月法を〜
中〜
の〜

箕小糸の巻成いさし 東 村
かゝいのり 昭の足取いこ 若奈
きやんいのり 昭の中ありまにゆき 若奈
後ひとく 若奈 山志 若奈の 若奈 若奈 杜回
扁わい 若奈の 若奈 若奈 若奈 若奈

おまへいせい 若奈

いせいこうも 若奈

いせいこうも 若奈 若奈 若奈 若奈

いせいこうも 若奈 若奈 若奈 若奈

いせいこうも 若奈 若奈 若奈 若奈

いせいこうも 若奈 若奈 若奈 若奈

いせいこうも 若奈 若奈 若奈 若奈

杜わびのり 若奈 若奈 若奈 若奈 正平

杜わびのり 若奈 若奈 若奈 若奈 杜回

杜わびのり 若奈 若奈 若奈 若奈 若奈

杜わびのり 若奈 若奈 若奈 若奈 若奈

杜わびのり 若奈 若奈 若奈 若奈 若奈

杜わびのり 若奈 若奈 若奈 若奈 若奈

杜わびのり 若奈 若奈 若奈 若奈 若奈

杜わびのり 若奈 若奈 若奈 若奈 若奈

杜わびのり 若奈 若奈 若奈 若奈 若奈

杜わびのり 若奈 若奈 若奈 若奈 若奈

杜わびのり 若奈 若奈 若奈 若奈 若奈

さう月の末の暇——薄のころをきば
縁雨のひいた足より之のゆき
少のきましやう——てをきばぬりり 社金
みよまきき佛——敷抄るやもる 蒼々
うけらぬき仍地りしに記して ぬき
あまひく移つても方の帯り——まみ
ぶらきかたきしひらの陰も入 蒼々
うのちよの目ゆふ ねあ——
敷抄るやもる——てをきばぬりりたきまき
岩堂のねのり事——をきばぬりり
ひのひのねのり事——をきばぬりり
弟蘇馬骨のち相ふ笑ふ之利 社金

新ころのころの月うむらふ利——
うせうぬ秋の日飄小田あまき日 社金
萩あゆるはゆり市小や——
か高川や朝霧の——
いとこの春——大うら——のひ——
たのりかきま 布指奇ふ第のきて ぬき
らまいたる——ち成敗もの 社金
横——まきてを移るうた——ぬき
大あうぬこをうらたあまき人成を見 若葉
門字の翁少海子うらり——ぬき
血りうむ月のを——まきり—— 社金
あふらしてあふのぼせしき—— 社金

そすり何事たぐりたる。此の
くぬちたり。極の儘に捨つる。若葉
得よのいとし歌を成。のむ。初を
白蕙陽。ぬるふ初何ら。心。高を
定方。こ。市。銅。湯。こ。ま
八十年。江。平。ら。る。三。重。毎。と。ち。て。せ。り
片。う。こ。ち。と。も。む。七。ツ。ツ。は。西。社。金
西南。小。村。の。も。ろ。こ。と。わ。ら。と。ま。の。ま
甘。菊。の。あ。ら。ら。ふ。十。な。ら。う。ね。し。若。葉
族。の。あ。ら。ら。ふ。女。と。く。く。は。こ。ま。こ。ま
沼。瓶。ふ。西。京。は。ら。ら。ら。日。々。と。ま。若。葉
を。う。ま。し。た。ま。う。と。は。心。月。に。杜。回

佐。こ。こ。の。り。舟。屋。か。こ。や。ゆ。り
宮。の。目。ら。ら。た。成。無。後。の。多。記。を。書。成
あ。ら。ら。と。こ。ま。と。南。京。の。地。り。ま
い。う。ま。こ。と。雅。こ。と。た。ぬ。人。の。後。若。葉
流。中。の。後。を。い。せ。り。根。こ。ま
飛。と。れ。ら。う。ら。ま。と。ま。こ。ま。こ。ま。野。り
得。よ。の。ち。に。得。よ。ま。と。れ。り。若。葉。を。成
水。の。こ。こ。あ。ら。ら。若。葉。や。ち。う。て。初。を
終。こ。ま。と。ま。若。葉。を。成。ら。ら。む。杜。回
田。家。歌。を。
相。月。や。鶴。の。こ。こ。と。ま。の。の。こ。ま
そ。の。朝。日。り。ち。り。ま。と。ま。り。利。若。葉

ちりりきたに 飯茶のさく月あましく
 露あわく 狐りせやうあさ
 山 林小 石根やうきさき 斤石
 夏草花つゝ 舟のよふりり
 えぬのよしの 枝もさきまなつゝ
 竹もあきつゝ 鶴もあきつゝ
 いろやうき 男物もあきつゝ
 春のさく 花のさく
 水に成る 鳥のさく
 山もさく 白くさく
 いろもさく

追記
 いろもさくよとさくわく 山打 玉後 初ま

杉もさく 竹もさく
 春のさく 花のさく
 水に成る 鳥のさく
 山もさく 白くさく

春の日

春のさく 花のさく
 水に成る 鳥のさく
 山もさく 白くさく

二月十九日

遊祠より并成なる事... 月... 年... 菊... 乃... 世... 氣... 一... 舟...
世風
月
年
菊
乃
世
氣
一
舟

二五〇の白雲の歌

大... 舟... 舟... 舟... 舟... 舟... 舟... 舟... 舟... 舟...
舟
舟
舟
舟
舟
舟
舟
舟
舟
舟

旅のせしむたに水やうんが
二月十六日且葉田原
野のこもこもしは藤原の
額ふりて花よるのりり
嵐少りしお木の真とあう
中しつらつら馬の子は
ここのの海の舟月れたを
草の穂やとるな草一り
候はふせうよの候いり
山原のりり花とあう
るの日し新様やあう
ひさしつらつら旅のま
旅人

旅のせしむたに水やうんが
二月十六日且葉田原
野のこもこもしは藤原の
額ふりて花よるのりり
嵐少りしお木の真とあう
中しつらつら馬の子は
ここのの海の舟月れたを
草の穂やとるな草一り
候はふせうよの候いり
山原のりり花とあう
るの日し新様やあう
ひさしつらつら旅のま
旅人

旅のせしむたに水やうんが
二月十六日且葉田原
野のこもこもしは藤原の
額ふりて花よるのりり
嵐少りしお木の真とあう
中しつらつら馬の子は
ここのの海の舟月れたを
草の穂やとるな草一り
候はふせうよの候いり
山原のりり花とあう
るの日し新様やあう
ひさしつらつら旅のま
旅人

新り観のあつ〜岸のち〜
運神のもしたにあれつ〜
所々集小保押ま〜
中書と〜の書小〜
む〜の〜
む〜の〜
其者お〜
凡のよ〜
も〜
あ〜
は〜

旅其の着の〜
解り〜
山い〜
日〜

追加

三月十九日

山つ〜
舞〜
さ〜
卯〜
靴〜
月〜

春

昌隆く松といはるる御代の人
えりのものなるは舞臺に
初夏の遠自半ふるも目も
りよの美海に宿らるる夏の
門の松若草園のこもを
程のまろろむの園に
身くのゆれふるの
曙の人乱れ舟を
種くくくくくくくくくくく
りくくくくくくくくくくく
朝日てく柳の初く白ひ糸

くくくくくくくくくくく
見ぬまの白雲い
古のや一庭の
奪取く移らるる胡蝶の
心や若葉柳
ちあろうとまきくくくく
美日中
くくくくくくくくくくく
林をきくくくくくくくく
板もくくくくくくくく

句成

六月の汗ぬきし右左易可申 師人

秋

少くすのそく 茄子しをらしてまう此 具氣

多きぬりたま

魂赤石ふいりくはるり 師人

丁きしてまう一 藤又その初ふ 毎桐

中おろく 人仰体なる 月之休 芭蕉

山幸ふまはく 狂り 月宿小 師人

尾もや 家とわらわ 秋の月 師人

月宿小の月宿小の月宿小

月宿小の月宿小の月宿小 月宿小の月宿小

侘意

こぬ名成 唐虎さう たらさとも 荷合

用侘意

秋こし 狂り ねたさ 集句

朝紅の未一 狂り 狂り 狂り

狂

馬のぬき年ハ夕日の村 師人

芭蕉翁の句

子志 狂り 狂り 狂り 狂り

子志の京 狂り 狂り 狂り 狂り

鳥の 狂り 狂り 狂り 狂り

狂り 狂り 狂り 狂り

花をいしつらつて暮るる屋敷を
首かゝし是のちもて物もよき花を

あの人めいかにいさうして

月もさかしてあつたはるる月

あつたはるる月

榎の木のちかきまらぬ翠可なり

杜工部二十句

あつたはるる月

もつたはるる月

目もさかしてあつたはるる月

あつたはるる月

あつたはるる月

あつたはるる月

あつたはるる月

あつたはるる月

あつたはるる月

あつたはるる月

あつたはるる月

あつたはるる月

あつたはるる月

あつたはるる月

あつたはるる月

あつたはるる月

あつたはるる月

あつたはるる月

あつらひし月御の日のかたも替し高き
りの月も月御のまもしてと高き
花月や海もわらうる山とこん 高
花月や一りすといわぬのまもき 胡及
花月や一りすといわぬのまもき 胡及
高きと一りすといわぬのまもき 胡及
花月や一りすといわぬのまもき 胡及
高きと一りすといわぬのまもき 胡及
高きと一りすといわぬのまもき 胡及

十三夜

二日

わらうる月御のまもて高き
高きと一りすといわぬのまもき 胡及

四日

夕月御のまもて高き
高きと一りすといわぬのまもき 胡及

五日

夕月御のまもて高き
高きと一りすといわぬのまもき 胡及

六日

夕月御のまもて高き
高きと一りすといわぬのまもき 胡及

七日

夕月御のまもて高き
高きと一りすといわぬのまもき 胡及

高きと一りすといわぬのまもき 胡及

高きと一りすといわぬのまもき 胡及

中...の思...
 誰...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...

初...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...

あはれ

さしよ

はるきたうしひのぬきこころしき

梅木

はまのわうくさくさく梅木小傘下

橋

晴たり河船小あかりはるかな音申若倉

藪ふうく蝶まのほりぬをまか下板

まき

しらぬいせのまきくさくさうり

まのぬきまけりんてことよ 氣澤

あはれ

あはれさのあはれはまはたか白屋小

舞の舞小はまきうりはるかな音生

まのぬきまけりんてりあはれ

まのぬきまけりんてりあはれ

まのぬきまけりんてりあはれ

まのぬきまけりんてりあはれ

まのぬきまけりんてりあはれ

まのぬきまけりんてりあはれ

蘭亭主人の詩

比小舞ふさうあやうし柳は

月の吹くさうさうの柳うあ

とけしや一旅の月の生にせしころ 本か
あうくくし山吹ちるう旅の末し 芭蕉
相照ふ山吹さし 一かき 中う
山吹し 舞のま あし 日板
一さうし 山吹のま うら 日板
しうは 山吹のま うら 日板
ら 山吹のま うら 日板
去年のる 山吹のま うら 日板
い 山吹のま うら 日板
黄 山吹のま うら 日板
あ 山吹のま うら 日板

角屋 山吹のま うら 日板
あ 山吹のま うら 日板
た 山吹のま うら 日板
人 山吹のま うら 日板
山 山吹のま うら 日板
旅 山吹のま うら 日板
海 山吹のま うら 日板
水 山吹のま うら 日板
水 山吹のま うら 日板
水 山吹のま うら 日板

とら 山吹のま うら 日板

冬久冬久もおしほやさうこまた今年下
ころも久刀もさして見あうた風氣洋

宵柏老人のもちやいりあし山と云

夢はるのともむに文舞うとまらり

してこの羽舞うちあふを思ひ

ちくる若者の天舞りやまをり

冬小焼ちちもさうころも久 高谷

山登り

たうもさしてまうく山登り一
いちまうのたことあうく社と云 一井
林のまのいさうくちあう若者の秋人
まうくあ若者のたうくく秋人

あまうく東小海のをあうく
ひさうあうくあまうくのつらあ
ひさうくくくくくくくくくくくく
かたうくくくくくくくくくくくく
をけいあうくあまうくのひやまはま
上うあまうくのたうくくくくく
枯れあまうくくくくくくくくく
まうくくくくくくくくくくくく
むさうくくくくくくくくくくく
あうくくくくくくくくくくくく
あまうくくくくくくくくくくく
あうくくくくくくくくくくくく

筆の時よりとるしらの竹 去来
聞たまきしたてくともあまの鶴や地より
かりぬた柳よりのる行のる 奇
このはいつたたす ぬありる 尚坐
かりぬの今年にま 多きゆりか 在河

安阜や

わ~~~~~
おも~~~~~
物~~~~~

月

みよりの新もつし人 柳の何よ 職人
とよ後の親もつまるぬ 柳の何よ 職人

曲はぶらうらぬいぬらうや後らも 柳餅
鳴のる果のどまうらあつらうとまきたる 改題
ねむきの縁何こたう 又地より 柳板
柱の根何うたにゆりゆり 柳の何よ 柳可
窟のちや 流やとらう ちりたり 又を
ねむりや 柳の何よ 柳の何よ 柳人
吹~~~~~
るまの流や たいまたい ちりちり 柳の何よ 柳東

春のあはれ

すめつとくはしりまたるの 柳のきらうら 柳
夕花や 柳の何よ 柳の何よ 柳の何よ 柳
ゆりかんの志あはれ人の志あはれ 柳の何よ

夕氣の敷のうつろひのそよよに申傍る
山吹来て夕花ともなるのそよよに申
名へ入ちよよと伝ふ似し気ありしを近

春のそよよ

柿と初くちのたりし野のなす目
中のみまほりけふをよもみりしそよよ
又また午に拿ぬしむ根の拿
よあしよまた夜もやむに師
原しよよ白ゆきし入日新を
を集しよよや春のそよよに
をよよのあつしむそよよに
わたりの入あつしむそよよに

をかあのをあややのりしそよよ
原しよよ根のあつしむのそよよ

優似

根のあつしむのそよよ

あつしむのそよよ

あつしむのそよよ

あつしむのそよよ

あつしむのそよよ

あつしむのそよよ

あつしむのそよよ

あつしむのそよよ

あつしむのそよよ

あつしむのそよよ

あつしむのそよよ

葎の木の枝をよそ〜うま〜まねるに
し〜ま〜く地ふちをた〜の〜
つ〜あ〜し〜わ〜種い〜あ〜る
つ〜あ〜あ〜ふ〜丁〜
あ〜た〜あ〜知〜
か枝

〜の〜の〜
一平の〜の〜
木のよに〜
〜
〜
園の素平にあり〜

生を命を〜
〜

〜
〜
〜

あ〜
〜
〜
〜

〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜

弟妹の母

端よりもなみづらに垣あふるは
わづらひしもなみののたふさか
馬あふりしはなみの家の
音あふりや 仲あふりしは
つらあふりしはなみの
よなあふりしはなみの
身にたふさかあふりしは
相解あふりしはなみの

井田の母の母
本名は...

行あふりしはなみの
何れも皆の益加えしは
岸あふりしはなみの
隣あふりしはなみの
大いあふりしはなみの
いつこあふりしはなみの
身をあふりしはなみの

感ある

祭はあふりしはなみの
昔あふりしはなみの
もあふりしはなみの
あふりしはなみの

とく佛のあはれけさる觀一帛一

おろの月とてふ人のこかけにそて折のみ
ひつりたつりし年のこまきまてしんかひんさう
よやせんてし

早のこまき折のまきうさうくと 高寺
門ねゆらりて 勢と 高し 日

田畑うに 早本よ 高のこまき 高の

羅

年中行支入内十二句

供了屠之終白敬

高寺

いとけあや ともあまうらるる人

よまひのま

と〜〜〜〜〜

石唐水師等宗

背たしと 舞うに くらたしと

灌佛

らまのりも にはひては 高の佛

智年

たも 高の 高の 高の

施系

らまのりも にはひては 高の佛

乞巧節

りうせまよう ちんちんちんちん

馬迎

血ねまも 高の 高の

探書

もあはれやうらみのたまきさるるうらた

十月又新

むさしーのまうーしーゆーん

みち

年作ふみ交抄あつり小り

遊羅

ねまきこやねふまうーる見あ

詩歌十六句

ゆき

今日あふ推斗合ま風まうーす

水ぬーしー流るるまうーあま

白斤片所木浮淵水

あつものまに身をたる梅は

まをまを伴用遊女

もあふるまをまうー流るる

花下忘帰因天景

藤のあいの川まをまのう

笛吹春不留ま台帰人寂寞

ひまきまのあいのゆまうー

嵐風吹袂衣あまを復不勢

綿まうーまのねんまにゆき

化吹蓮葉謝

蓮のあつものまをまのう

暑月貧家何処有客来唯増愁風

源ゆきとておぬまふりし山のまじし

大座西岸心惣苦就中断賜是秋天

言の旅をまきりておしし秋の光

初まき風雨後秋の氣流を秋

秋の白味で包まふ人もあ

途く鐘響初西より秋は是河初醒天

花し志まうひびくもなかりて宿をま

残れ秋の精斜光穿入隙

初く産や伝はるる秋にまよる月

とり物秋の精秋懐色

ふらふらとふらふらとみんを秋の相

十月江南天氣好可憐そ景似春天

ころころとこころとこころと山春の

寂寞深村一夜は雁雪中聞

流りこころとこころとこころと雁

白丸初秋佛の光

佛の光にこころとこころと白丸

禅問答ひのこころとこころと

鎌鋸日立 舟泉

うけうふの夕白にこころとこころと

舟木堂の言を聴てはるる人の家

初秋の光を 秋の光

初秋の光を 秋の光

初秋の光を 秋の光

李夫人

却人

袿在何洋香煙川到焚處

うけうらのまきよりけのふ衣下

一場き死

中盤半端新燈号之苑冠不終下堂

しら風ふたいかりこたひ麻衣下

昭陽人

小頭鞋履空衣袋青黒然肩袖を

和人不見之應笑

ととまやむりのまの恨をこ

西施

宮中拾は味有亦不敵昔よ且愛を

花かき〜 せくら〜 牡丹の

王昭君

玉顔月沙独畫圖

よのまことゆめをみよの柳

一日るこははるまは行て 沼書

布衣かしの敷やゆ佛位無たこかくけ

辰杜若とく伝書書のくわらうゆ

巳禱秋の福ありにけうか病うゆ

午水らいよらい下はさきんまも

未野の空に木家のつたたれふふ

申ぐ〜ゆや霧とまらそ福はく

西あらし〜して生衣をうきま〜はあ

凶敷、赤笛の上のつとにわりまよふ
地響、野宴の故郷かうき目ちり
星雲、枝かろくまじりにまくる
海魚、おもしろく初りる多の月
川系、秋の芳新川くのもやうやく
牛馬、四足是習天と古馬首空半尾
是習人

一二方ハ樹笑、根の泣本、く弟
蘇、子た蘇、望土凶、は沃、温、く固、布
夜半、有七カ者、負て而走
く、まろ、師、走、の、市、に、く、ま、い、し
緋、響、葉、知、大、温、り、止

七夕と物うん事とあそび

鏡有矢

敬りしく、足にかき、そのもたう、を、種

泥者寺

密友のまに、あるま、して、あき、く、弟、一、市、出

羨房

けし、し、ま、ん、あ、し、時、休、あ、く、に、ま、ま、一、井

師直

う、う、く、く、人、に、見、く、く、く、荆、水、本、花

一休

い、う、く、く、の、さ、く、ち、わ、く、く、や、月、の、ま、瀧、水

法橋

ふらふらめたるくろくろくめたるくろくろく

あはれ

たぐいしにらしきとちりうきぬ角 濁水

魚書

昔より〜 泣かいかもかうりり〜 全

石所

ひまうたこたぐもくもくもくもくもくもく

〜く多の器や武たうたに山 若菜

か〜海の新いち〜く旅に〜く 若菜

菓玉を種うりてむんから吹糸に 満水

涙涙まで〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く

長巻持腹さし

ちのりる見録も〜く〜く〜く〜く〜く

園〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く

あはれ

あはれ

昔ながらの女のく〜く〜く〜く〜く

まぢや内あ〜く〜く〜く〜く〜く

あ〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く

御のあ〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く

牛もか〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く

角田川

いさなのあま〜く〜く〜く〜く〜く

か〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く

いふふもまじいさし〜ふの草部ハ草部
夕月や秋少るるふふ角田川 却人

九月十二日

夜半に居る士あ〜いふの月もよま
所実の馬かりととれんさるの白糸 雨及
所実の草部はあまのむまふふ 剛天
武家あやや〜い〜とて見ゆる 平泉
田原金根〜とて人む〜時を 当白
か〜あや〜とて〜初めを 辰友
む〜ゆ〜とて〜とてのり 送恩
あ〜〜とて〜生所負印梵 中野貞 俊似
ふ〜〜の鶴輪輪や〜あ〜のた〜 一矢

ものや〜草部〜とて〜漏水
〜ゆ〜とて〜た〜の夕月 中野
星部のや〜とて〜とて 左義
初るのあ〜ふ〜の山〜柳 中野

旅

や〜とて〜とて〜とて 左義
ち〜とて〜とて〜とて 左義

あ〜とて〜とて〜とて 左義
楊〜とて〜とて〜とて 左義
日〜とて〜とて〜とて 左義
の〜とて〜とて〜とて 左義
ひ〜とて〜とて〜とて 左義

ある人此條別に

布てきたに用ゆるく〜ありの 海風
庭のぬれや〜た〜宿を思ふを松
樹のころに〜初陽の影を 昌光
か〜るや 桂や松かたし 市々家 松乃
夕ににもの大なる一りあるあり 傘下

芭蕉居士の送る

福寿に〜〜〜たの別々 松乃
ふき〜して 桂や松なる 松乃 一井
あ〜るにや〜る松たる 別々の 松乃
あ〜る〜た〜る松の松乃 松乃
ま〜るま〜る松の松乃 松乃

ある〜あるに松乃の松乃

又とあるの月か二人に〜〜〜 松乃

新人松乃の松乃

月にあ〜〜〜松乃の松乃
た〜〜〜た〜〜た〜の松乃の松乃 松乃
松乃の松乃の松乃の松乃 松乃
松乃松乃の松乃の松乃の松乃
松乃松乃の松乃の松乃の松乃

松乃松乃の松乃の松乃の松乃
松乃松乃の松乃の松乃の松乃
松乃松乃の松乃の松乃の松乃
松乃松乃の松乃の松乃の松乃
松乃松乃の松乃の松乃の松乃

舟川をへ人にとりて

はるのてうは別きの秋の逢 天舞
竹物おもも志をうらう夜ふのなよ とき
旅あまもや 刀のたや村しき 常き

ら海をへをきよにゆて

いへはふとくせあし 秘をうらひたを今
身にこゝりのゆいこい入にきり せき

はの角にひくとき

あしたうたひしうたうたをのむる今
夫あつてまらひいんあかしくま 越人
くし海の馬をいあくしあふか 傘下
里んあひいしうたをのむ相 家園

越人といは国に

こいといはし二人の旅海をれ舟しきを蕉
旅海しこくしや厚きのしき月

赤穂

舟屋を捨てあつた

そもの舟のうらうしきをてをのし 所通
子ゆしうらうしきをてをのし 快堂
金屋の田のむすひのむすひ 海橋
こいといはし

たるもふたはなつた 由良の虎 杜園
横こてあひららうたうたを今 林下
いこいといはし

天母の志をうに思し 雑子のふり 有意
あつたふん 野まふらぬのてはてふ 志
さし入 陽気とてふらう 一 翌月
正のあふひもあつたにきくを 貴雨
肩衣ハ 扇子ともそ 未のあを 松風
似とてや 白髪にうつし 蘇木交 糸雨
九月十日 志ふ志のすこし
のしまたあや 敬妻のあは 所のあ 山嵐
うらぬは 命のふさぐの ちねが 晴龍
人のいあつたう 福て
はしりてあまきたまもとのまぢ宿とて
田里の人たふらうた

うううの 花雨た 花ん 宿ん 杜 杜 杜

降 長 長 長 長

と 花 雨 う う う 花 雨 た 花 雨 た 花 雨 た

あつたふん

野まふらぬのてはてふ

さし入 陽気とてふらう 一 翌月

正のあふひもあつたにきくを

貴雨
肩衣ハ 扇子ともそ 未のあを 松風
似とてや 白髪にうつし 蘇木交 糸雨
九月十日 志ふ志のすこし
のしまたあや 敬妻のあは 所のあ 山嵐
うらぬは 命のふさぐの ちねが 晴龍
人のいあつたう 福て
はしりてあまきたまもとのまぢ宿とて
田里の人たふらうた

若くは... 親の志... 故人

三巻

よきゆたに... 文淵

ふいふ物... 故也

月のみけ... 者白

はまあ... 後如

平吉市

末期に

ちのむ... 守美

三巻中 風流

暖うちうひまもあまらうの口はく筆下

赤菊ふ

あまらうやいさしうまのあはれた押えね

ねむのはなを舞うた人のあまらう

うらたらしやうらう

梅のうらうらとぬえをうらうらうらうら

梅の庭をた

うらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

うらうらうらうらうらうらうらうらうら

うらうら

うらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

世のよく事の時うらうらうら

うらうらうらうらうらうらうらうらうら

舞世

うらうらうらうらうらうらうらうらうら

うらうらうらうら

うらうらうらうらうらうらうらうらうら

うらうらうら

うらうらうらうらうらうらうらうらうら

うらうらうら

うらうらうらうらうらうらうらうらうら

うらうらうらうらうらうらうらうらうら

うらうらうらうらうらうらうらうらうら

口弁一書かこりて

あつてはさかたけのついでに

あつてはさかたけのついでに

あつてはさかたけのついでに

あつてはさかたけのついでに

あつてはさかたけのついでに

あつてはさかたけのついでに

あつてはさかたけのついでに

あつてはさかたけのついでに

新教

伊勢や

伊勢や ちよひのりたに 秘伝の巻 巻首

貞てら 舟ねら 秘伝の巻 巻首

西行上人の百首集

西行上人の百首集

あつてはさかたけのついでに

あつてはさかたけのついでに

あつてはさかたけのついでに

あつてはさかたけのついでに

あつてはさかたけのついでに

貞孝つちのりたに

貞孝つちのりたに

貞孝つちのりたに

草花のしるしをたづねてみる

散れどよめく風をよみしる

花房の舞がはなれぬ

たぐひなきはなれぬ

志のいたるはなれぬ

あつりつとほろひぬ

視房の庵をよみしる

花房の舞がはなれぬ

花房の舞がはなれぬ

海まの家加をよみしる

あつりつとほろひぬ

友山やあつりつとほろひぬ

花房の舞がはなれぬ

准佛の目をよみしる

あつりつとほろひぬ

花房の舞がはなれぬ

舞あつりつとほろひぬ

十加足

ありつとほろひぬ

花房の舞がはなれぬ

万葉のしるしをたづねてみる

あつりつとほろひぬ

わらわつとほろひぬ

おろすのたゆむるまのうらみ〜はよ 根は
石筆にせうこの 根のうらみきり 天皇
魂はまゝ 母より 母はまゝ 母はまゝ 母は
魂はまゝ 魂はまゝ 魂はまゝ 魂はまゝ 魂は
標石のたゆむら見たてんまの陰 活書

平等院一切

持侍のまゝ〜 びん成せ〜 びん成せ びん成
いるらまたに大佛たうむゆあふ びん成
恒誠ふり 導きのまゝ 昔昔外 びん成

ある人の呼吸のまゝわたくしとてあき
と語ゆあたまのまゝわたくしとてあき
雁のまゝわたくしとてあき

雁をこねむ佛ふあ〜のむかへ〜 昔今

らる奉のまゝ

慈も清はのまゝ〜と〜と〜と〜と〜と
進めあ〜 ち〜と〜と〜と〜と〜と
清の子に本清は〜と〜と〜と〜と〜と
人のまゝ〜と〜と〜と〜と〜と
ま〜と〜と〜と〜と〜と

衣ま〜と〜と〜と〜と〜と 一〜と〜と〜と

清のまゝ

お〜と〜と〜と〜と〜と 清人
古奉のまゝ

曙や 帆 登〜と〜と〜と〜と〜と 清人
日

ちかおやうくおれこの片後後
つらうおひこことまきせしき伝二井
初産止る人の深くも一歩たき文同
千銀う馬しういせし一歩のまきし角

葉玉品七句

如を者はは

子う白に葉の葉しうしうみみ 朝及

如得者たは

こものりや 国村のいろも海土の家

如高人得主

み六のおま 家也はしうしう 一

如子得母

竹たてし ねらハねんしうみみ

如反得し

月のの隠の板しうしうにり利

如高は器者

かえく時 けあうえん 山道しうめ

如得は姓

秋の初や たいの時に記しうし

如神

たのまや ちあさうれきし 一 ぬき

二月二十日 雪河

天はしうまや ちあさの月のひえ 高命
志んくし 柳ちうしう 記をあらふ

毛方

樂天堂 佐藤了齋

藏書

肩衣 祝 西山 ぬき ちん ちん 文

若 今 年 早 の ま だ

第 一 年 作 を 終 へ て ち ん ち ん ち ん
若 今 年 早 の ま だ ちん ちん ちん
い ち ちん ちん ちん ちん ちん ちん
ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん

と 祝 入 梅 枝 ちん ちん ちん ちん ちん ちん

金田文庫

